

“Cyclops” 挿話の Gigantism

永 原 和 夫

James Joyce は1921年の *Ulysses* 「構成一覧表」でこの章の技法を gigantism と呼んだ。極端に拡大し歪曲すれば、きっと風刺的な効果が生まれる。風刺は笑いをともなった暴露あるいは批判であり、そこには暗々裏のうちに倫理的な立場が秘められているものであろう。この章の倫理的立場は、アイロニーに満ちた *Ulysses* には例外的なほどはっきりとしている。それは “love...I mean the opposite of hatred” (327)¹ という跡絶えがちだが、断固とした Leopold Bloom のことばで言い表わされている。笑いはいたるところに渦巻いている。例えば、「殺してやる」と叫んで、口幅ったい意見を述べたあげく、酒もおごらずに立ち去ろうとする憎むべき外国人めがけて、ビスケットの空罐を投げつける愛国主義者 (336) に腹をかかえないとしたら、不感症かよほどの忍耐力の持ち主だ。この章は、David Hayman が言うように、引き伸ばされた道化芝居として読むことができる²。しかしその笑いが暴露しているものとなると、なかなか捕捉し難い。なぜならそれらはこの章の二つの話法である話者と挿入文の文体の中に慎重に隠されているからだ。Marilyn French はそれを女流作家特有の感性で暴力と言った³。だがその根はもっと深いようだ。

Hayman は “Cyclops” 挿話の愚かしい立回りを “the disorder of melting minds which accompanies the decline of the sun” の比喩だと言って、この章の言語の混乱や “factice chaos” を “Circe” 挿話のそれらと比較してい

1. Text には Modern Library, 1934 を用い reference は本文中に入れた。
2. “Cyclops”, *James Joyce's Ulysses: Critical Essays*, ed. Clive Hart and David Hayman (Berkeley and Los Angeles: Univ. of California Press, 1974), pp. 243-275.
3. *The Book as World: James Joyce's Ulysses* (Cambridge: Harvard Univ. Press, 1976), pp. 138-156.

る。⁴確かに笑いは無意識に近く、道化は意識と無意識、合理と不条理との間を平気で行き来できる。そして、話者の叙述のリズムを中断させ、長々と茶番劇を演じて現われた時と同じように忽然と消えていく、風船玉のような挿入文は、“Circe” 挿話の hallucinations によく似ている。だがこの章の “absurd behavior” は、Hayman 自身が別のところで言っているように、“Circe” 挿話の “absurd illusion” とは別物だ。⁵両者の相違は意識と無意識の違いだけではない。“Circe” の挫折や願望が私的なものであるとするなら、“Cyclops” の憎悪や偏見は公的なものである。そして Joyce の場合、これらの相違はかならず言語に現われる。“Cyclops” の言語が公的なものであるということは、Bloom がこの章ではじめて、そして完全に外から見られていることから一部分説明がつく。しかし、この作品の各所に様々な仮面を被って現われるさまぐれな作家のいたずらのようにみえる挿入文の文体や、第一人称の主観的な話者の話法が公的なものだというのにはまだ説明がいる。

もう一つの説明は彼等の匿名性にある。Joyce は、Odysseus が Cyclops の洞窟で九死に一生を得たとき、Outis (Noman) に身を隠し羊の群にまぎれて幽閉を逃がれたのに敬意をはらって、この章で、“the citizen” と呼ばれる超愛国主義者をはじめ多くの片方の眼からしかものを見ることができない、偏見にとらわれた無人格者すべてに名前を与えなかった。⁶“Nameless one” と、この作品のあらゆるものが再登場する、“Circe” の表現主義の劇場で呼ばれる(461) この章の話者は、その生き生きとした利己的なことばにもかかわらず、Odysseus がまぎれこんだ羊の群の体现者である。彼の徹底したシニシズムはトロイ攻略に加わった武将たちの中でも最も卑劣な精神の持ち主、Shakespeare の *Troilus and Cressida* で “Lechery, lechery; still wars and lechery” と

4. “Cyclops”, *James Joyce's Ulysses: Critical Essays*, p. 266.

5. “Forms of Folly in Joyce: a Study of Clowning in *Ulysses*,” *ELH*, XXXIV (June 1967), 274.

6. この章の眼と名前への言及は、Stuart Gilbert, *James Joyce's Ulysses: a Study* (New York: Vintage Books, 1952), pp. 270-274 参照。

叫ぶ Thersites によく比べられる。⁷しかし “collector of bad and doubtful debts” (287) である彼は、社会のあぶれ者、outcaste か pariah である。彼はその痛烈な毒舌と情報とで人々から恐れられ、酒で機嫌を取られているが、彼の情報はすべての人が知っている街のうわさであり、真の影響力はない。法（ダブリン警視庁の Old Troy で現わされる）は利用こそすれ (287), それに縛られるようなどちは絶対に踏まない (339)。彼は常に情報のソースを明かさず卑怯者である。無頼漢を気取りながら権威には卑屈に頭を下げる。彼が愚弄し嘲笑するのは弱い者ばかりだ。目的も主張もなく、彼の唯一の関心は酒だけである。彼が会話に加わるのは酒をせびる時だけであり、酒を飲むときのよろこびようといったら大変なものだ。“Ah! Ow! Don't be talking! I was blue mouldy for the want of that pint. Declare to God I could hear it hit the pit of my stomach with a click” (293). 根からの日和見主義者である彼は、自分のユダヤ人排斥思想を忘れて Moses Herzog に雇われ、Foxy Geraghty を恐喝している (287)。

これらがすべて民衆の特徴であるとしたら、彼のことは、きびきびしたリズムをもち即興性にあふれている割には、彼に名前がないように個性がなく、無人格である。

Arrah! bloody end to the paw he'd paw and Alf trying to keep him from tumbling off the bloody stool atop of the bloody old dog and he talking all kinds of drivel about training by kindness and thoroughbred dog and intelligent dog: give you the bloody pip. Then he starts scraping a few bits of old biscuit out of the bottom of a Jacob's tin he told Terry to bring. Gob, he golloped it down like old boots and his tongue hanging out of him a yard long for more. Near ate the tin and all, hungry bloody mongrel. (300)

Joyce はこの人物の語法をダブリンの the Coombe, “a lower quarter of the

7. Richard Ellmann, *Ulysses on the Liffey* (New York: Oxford Univ. Press, 1973), p. 110.

city” の俗語を模したと Mary M. Colum にもらしている。⁸ 彼のことばに生彩とある種の具象性とを与えているものは、手当たりしだい選びだした次の五例に見られるような、俗語特有の比喩的な言回しなのであるが、それらはかならずしも Dublinese ではなく、1904年にはすでに新鮮味を失っていたようだ。⁹

I'm hanging on to his taw now for the past fortnight
and I can't get a penny out of him. (287)

The old one was always thumping her craw. (300)

He's not as green as he's cabbagelooking. (307)

That explains the milk in the cocoanut and the absence
of hair on the animal's chest. (314)

Playing cards, hobnobbing with flash toffs with a swank
glass in their eye, drinking fizz and he half smothered in
writs and garnishee orders. (314)

このような調子のよい俗語的表現が本領を発揮するのは、ゴシップをふんだんに盛りこんで、他人を嘲笑するときである。次に引く Breen 夫妻が槍玉にあがるときなど、例えそれが無知とあいまいな記憶にもとづいていようと、ある充実感、明確に喚起された悪意のイメージ、嫌悪の熱中が作りだすある oratory がある。

Cruelty to animals so it is to let that bloody povertystricken
Breen out on grass with his beard out tripping him, bringing
down the rain. And she with her nose cockahoop after she
married him because a cousin of his old fellow's was pew
opener to the pope. Picture of him on the wall with his
smashall sweeney's moustaches. The signor Brini from Sum-
merhill, the eyetallyano, papal zouave to the Holy Father,
has left the quay and gone to Moss street. And who was
he, tell us? A nobody, two pair back and passages, at seven

8. Mary M. Colum, *Life and the Dream* (New York, 1947), p. 386.

9. この章の名前のない話者の Dublinese については Anthony Burgess, *Joysprick: an Introduction to the Language of James Joyce* (London: Andre Deutsh, 1973), pp. 36-39 が詳しい。

shillings a week, and he covered with all kinds of breast-plates bidding defiance to the world. (316)

名前のない話者は、このように誇張された痛快な毒舌で、Breen 夫妻だけでなくこの章のあらゆるもの——犬の Garryowen から the citizen, Bob Doran, Boylan, J.J. O'Molloy, Queen Victoria, Molly そして Bloom の父親まで——を貶め、歪曲し、罵倒していく。そして彼の最も口ぎたない罵詈謗を浴びせられるのは Leopold Bloom である。彼によれば Bloom は “lardy face” をしたおしゃべりで、その性的能力は疑わしく、妻は “ballalley” みたいな背中をしている。

And Bloom, of course, with his knockmedown cigar putting on swank with his lardy face. Phenomenon! The fat heap he married is a nice old phenomenon with a back on her like a ballalley. Time they were stopping up in the City Arms Pisser Burke told me there was old one there with a crached loodheramaun of a nephew and Bloom trying to get the soft side of her doing the mollycoddle playing bézique to come in for a bit of the wampum in her will and not eating meat of a Friday because the old one was always thumping her craw and taking the lout out for a walk. (300)

この声は中世の喜劇的祭礼で狼藉の限りを尽した民衆の声だ。それは *Finnegans Wake* の HCE の敵対者、彼を公衆の侮辱に曝すために尾籠な歌を作る社会のあぶれ者、Hosty の声だ。彼はよい眼を持っている。だがそれはあんぐりと瞳孔を見開いた古代の喜劇役者の仮面の眼であり、この章の最初で煙突掃除屋のブラシで危く穴を開けられるまでもなく、穴があいている。彼の心はもともと悪意と偏見の煤で汚れているのだ。彼は同情や憐み、他人の立場に立って考えるようなことは絶対にしないがまた、真理や理想について Ibsen 流の主張をする厚顔さも持ち合わせない。シニカルな傍観者で、毒舌と機知とを生きる手段とする男だ。

名前のない話者のことばは、奇怪な挿入文にはさまれるとき、きわめて生彩に富んだ自然主義の話法に聞える。しかしそれは同じくらい奇怪で不自然なことばである。彼が描く肖像画は対象を正確に写したものではけっしてない、それは悪意と偏見とをもってある一面をグロテスクに拡大した戯画である。別な言い方をすれば、公衆便所の落書きである。それは書いた者の下劣な精神を暴露こそすれ、書かれた者の真価を傷つけない。つまり彼のことはそれによってその人のすべてを表わしている *epiphany* なのである。名前のない話者の憎悪や偏見は彼が体現しているアイルランドの民衆の根深い不満、救いようのない挫折、そして真の価値観の欠如を表わしている。彼の笑いが大きければ大きいほど空虚に聞えるのは、それがこのような精神の貧困を暴露するからである。

だが、彼の意見がどんなに間違っていようと、逆らい難い重みを持っているのは、それが大衆の意見だからだ。街のうわさが怖くない者があるか。それは常に後ろから流酸を浴びせる。それと戦いようがないのはそれが “nameless one”, 存在のない者であるからだ。Odysseus に眼を射られた Cyclops が Noman にやられたと言うと、苦痛の叫びを聞きつけて集まった Polyphemus たちは、Cyclops は寝ぼけたか気が狂ったのだろうと言って帰ってしまった。名誉棄損で訴えると、“U.P.” と書かれた差出人不明の葉書を持ち歩く Mr Breen の怒りは、「気が狂った」Cyclops の苦痛に似ている。彼の訴訟は、J. J. O'Molloy が言うように、成立するであろう。だがそれは自らの “not compos mentis” (315) を社会に公表することになる。Mr Breen に同情する Bloom も同じようにこの常軌を逸した国の outsider であるが、彼は Mr Breen と異なり愚かしいほど正常である。だがまだこの “Everyman or Noman” (712) を論じるときではない。

第一人称の話者の話法が公のものであるように、そこに挿入される奇怪な脇台詞もある一般性をもっている。Hayman は、挿入文の文体がそこで扱われる主題と同じくらい多岐にわたるにもかかわらず、一様に “both subliterate

and non-personal”な特徴をそなえており、それは“Oxen of the Sun”挿話の純文学的で教養の高い、個性的な声と対照されると言っている。¹⁰また“Oxen of the Sun”の混成文は正確な模倣を目ざしているのに対し、“Cyclops”の挿入文の場合はすべて極端なパロデーである。話者の歪曲が現実を貶めようとする攻撃本能から生まれるとしたら、脇台詞の拡大は目的のない平凡な人々に目をつむり、現実を美化しようとする願望である。酒場の酔漢どもは、彼らにとってどうしてもよいまたよく知らないことについて、真面目くさって、口角あわを飛して意見を述べている。挿入文はそれを歴史、神話、神秘主義、政治、スポーツ、社会、法律、考古学その他の文脈で拡大する。そこに特に表わされるのは、酒場の市民たちがなんの信念もなしに、自分たちのエゴをアイルランドの黄金時代のふくれあがった夢と同化し、自分たち自身は王者の息子、忠実なキリスト教徒、ケルトの伝統と文化の守護者と見なしていることである。Joyceは、このような夢を売る通俗文芸の様々なジャンルと、それを無批判に受けいれて極端な愛国主義、ユダヤ人排斥思想、暴力礼賛に走る「ヨーロッパで最も後れた民衆」をふたつながら風刺するのである。テーマは「喧噪の日」¹¹と同じであるが、あの時の悲痛な態度とこの章のそれ自体が目的ではないかと思われるほどの笑いとの間には、大きな開きがある。

風刺の最初の矢はケルト文芸復興のロマン的な中世趣味に向けられる。話者が家畜商の集会に出席した Hynes に “Anything strange or wonderful, Joe?” と聞くと、答えに窮した Joe に代って挿入文が、彼等が歩いていくダブリン食品市場を神話的ムードでつつみながら、おどろくほど豊かなアイルランドを述べていく。

In Inisfail the fair there lies a land, the land of holy
Michan. There rises a watchtower beheld of men afar. There
sleep the mighty dead as in life they slept, warriors and

10. “Cyclops”, *James Joyce's Ulysses: Critical Essays*, p. 267.

11. James Joyce, “The Day of the Rubblement”, *The Critical Writings of James Joyce*, ed. Ellsworth Mason and Richard Ellmann (New York, Viking, 1959), pp. 68-72.

princes of high renown. A pleasant land it is in sooth of murmuring waters, fishful streams where sport the gunnard, the plaice, the roach, the halibut, the gibbed haddock, the grilse, the dab, the brill, the flounder, the mixed coarse fish generally and other denizens of the aqueous kingdom too numerous to be enumerated. (288)

この伝説的な美化と話者のシニカルな嘲笑とが鋭く対立しながら奇妙に調和するのは、両者とも現実を無視した極端な誇張だからだ。ケルト英雄詩のパロデーは、一生を眠りのうちに過した滑稽な英雄だけでなく、事実上の虚偽（マイカン区にない川の海水魚、失われた森林の異国の木）、陳腐な詩的表現や場違いなことば（aqueous や fuana）、真の叙事詩の語彙と新聞調を併置しテキストを嘲笑する。次の節では “Lovely maidens sit in close proximity to the roots of the lovely trees singing the most lovely songs while they play with all kinds of lovely objects as for example...” と lovely が濫発されて感情の枯渇したロマン主義が愚弄される。19世紀後半に盛んに翻訳されたケルト哀悼歌に充満する食料品は、長い catalogue となってついに空虚感を与える。Rabelais 風の catalogue と急激な bathos が gigantism の二大特徴である。夢を吸いこんで風船玉のようにふくれあがった挿入文の内部構造はきわめて弱い。それは話者の充実感に満ちた憎悪でひと突きにくずれてしまう。

...and from the gentle declivities of the place of the race of Kiar, their udders distended with superabundance of milk and butts of butter and rennets of cheese and farmer's firkins and targets of lamb and crannocks of corn and oblong eggs, in great hundreds, various in size, the agate with the dun.

So we turned into Barney Kiernan's and there sure enough was the citizen up in the corner having a great confab with himself and that bloody mangy mongrel, Garryowen, and he waiting for what the sky would drop in the way of drink. (290)

呼びもどすすべもないほど遠いケルトの栄光を、イギリスの収奪から、破滅的な暴力で、取りもどそうというこの老フィニアン自身は、Ossian 詩のパロデーで、“a broadshouldered, deepchested stronglimbed frankeyed redhaired freely freckled shaggybearded widemouthed largenosed longheaded deepvoiced barekneed brownyhanded hairlegged ruddyfaced sinewyarmed hero” (291) に変身する。この怪物の帯には “Cuchulin, Conn of hundred battles, Niall of nine hostages, Brian of Kincora” にはじまり “Dante Alighiere, the Last of the Mohicans, the Man that Broke the Bank at Monte Carlo, sir Thomas Lipton, the Bold Soldier Boy, Patrick W. Shakespeare” に至る “many Irish heroes and heroines of antiquity” の肖像を彫った小石がぶら下がっている (291)。そのハンカチ、“the muchtreasured and intricately embroidered ancient Irish facecloth” にはグレンダロー、キラニーの湖等々アイルランドのありとあらゆる観光名所の “moving” な風景が、排泄物によって描かれている (322)。ダブリンの最深部からわき出てきた Cyclops のような the citizen は、洞窟に映る影を自分の真の姿と感違いしている愚かしい酔漢である。話者はいつもの誇張した雑言で、国家の大義を論じる the citizen の大言壮語を “All wind and piss like a tanyard cat” と言って、挿入文が暗示しているものを裏付ける。この取り立屋の情報によると、イギリスの収奪を非難する超愛国主義者自身、アイルランド農民の収奪者であるらしく、殺されるのが怖くてある地方に顔を出せないようだ。

Cows in Connacht have long horns. As much as his bloody life is worth to go down and address his tall talk to the assembled multitude in Shanagolden where he daren't show his nose with the Molly Maguires looking for him to let daylight through him for grabbing the holding of an evicted tenant. (322)

すでに確立した文体のパロデーを通して示される Joyce の風刺は常に形式と

内容の両面に向っている。アイルランド文芸復興の中世趣味だけでなく、その夢を杖に生きている人間も同様に笑いの対象にされるのである。

この章の笑いは主として様々な文体の対比、衝突から生じるものであるが、それはまた文体間にある複雑な相殺現象を引き起こす。脇台詞は「自然主義的」な情景と併置されるとき強い異和感を与える。神話の高雅な文体と列挙的な叙事詩、20世紀の新聞調と商業文とが継ぎ合わされると一連の相殺現象が起きる。神話的な部分は catalogues で相殺されるまではそれなりに美しい。catalogues は Homer にあっては威厳があるが新聞調に変わってしまうとき笑いをさそう。報道文にラテン語風の語彙や場違いな美辞が混れば実感がうすれる。凝った文飾、知的に見せよう、教養を示そうとする気取りは、俗語的な生きのよい対話で区切られるとき簡単に足をすくわれる。対話はそれ自体痛快であるが、神話的文体や古くさい言回しにはさまれると、一層生き生きとしてくる。実際の情景は文体の対比によって更に生彩を加え、古い形式はその神聖を失う。同時に、実際の対話は現実味を帯び、擬似英雄詩は一度も現実をはっきり見たことのない者のペンから書かれたもののように見えてくるのだ。

Joyce はこの章で多くの新聞調を用いた。32の挿入文のうち約半数は政治、スポーツ、社交、裁判、地震の惨事等々を伝える報道文のパロデーで、この章を縮刷版の新聞のように見せている。McLuhan はわれわれの文化は活字の発明に由来する現実の視覚的な概念化によって偽りなものと化したと言っている。もしそうだとしたら、新聞は偽りを公共のものと化し、それにある権威を与える。たしかに、“A torrential rain poured down from the floodgates of the angry heavens upon the bared heads of the assembled multitude which numbered at the lowest computation five hundred thousand persons” (301), “After an instructive discourse by the chairman, a magnificent oration eloquently and forcibly expressed, a most interesting and instructive discussion of the usual high standard of excellence ensued as to the desirability of the revivability of the ancient games and sports of our ancient panceltic forefathers” (311), “It was a fight to a finish

and the best man for it. The two fought like tigers and excitement ran fever high" (313) といった事実をあるがままに報道する勇気を失った新聞が、Lady Sylvester Elmshade, Mrs Barbara Lovebirch や Miss O. Mimosa San (321) といった社交婦人に、彼女たちの虚栄心を満たす機会を与えるのだ。Joyce は新聞を大衆に事実を伝える媒体としてではなく、大衆の夢を暴露するものと考えている。これは奇異に聞えるかも知れないが、この章には事実を伝えない、あるいは積極的に事実を隠す文体が実に多い。そのよい例が議事録の脇台詞である。

Mr Allfours (Tamoshant. Con): Honourable members are already in possession of the evidence produced before a committee of the whole house. I feel I cannot usefully add anything to that. The Answer to the honourable member's question is in the affirmative. (310)

これは国家の制定した法律が人間性を偽ることを知っているとき、それを隠すために用いることばだ。それは Dignamの死をいたむ Bob Doran の 真情を伝えることができなくなった18世紀の丁寧な会話 (308) よりも悪辣なことばである。Garryowen の 摩訶なうなり声は常に話者の激しい響きを買っているが、挿入文の書評子によると、それは "the intricate alliterative and isosyllable rules of the Welsh englyn" (307) を連想させる rann と言われる。Garryowen は咽喉を潤らし水が欲しかっただけなのである。このような精神的対麻痺ともいうべき不能な学術語は "the distinguished scientist Herr Professor Luitpold Blumendulf" の "philoprogenitive erection" (299) の説明にも用いられる。アイルランド語復活の 肯否 を論じる市会からもどった John Wyse Nolan が伝えるのは元老のおごりかな審議ぶりであって、言語運動そのものは全然触れない。同じように古代スポーツ復活民衆集会の記事は "a most interest discussion" はまったく報道せずに、その代りに集会に出席した各界の名士の名を列挙する。

Joyce が *A Portrait of the Artist as a Young Man* で “a priestridden God forsaken race” と呼んだ国民の一面を暴露するのは、このような現実を無視した名前の羅列においてである。スポーツ集会には尊称、氏名、修道会名を明記した24人の聖職者が含まれていた。“God” が口ぐせになっている酒場の常連たちのえせ信仰は、Martin Cunningham が “God bless all here is my prayer” と言い、Bloom を口ぎたないことばで愚弄した the citizen が “Amen” と答えるとき (332)、より長い部分で笑いの対象になる。聖別礼の鐘の音を合図に侍僧たちに守られた十字架捧持者を先導に、教会のありとあらゆる高僧名尼からなる gigantic な聖者の行列が、Barney Kiernan の酒場を祝福するために現われる。その行列には “S. Laurence O'Toole and S. James of Dingle” といったアイルランドの聖者だけでなく、酒場の全員が即席聖別されて加わり、そのほかにも “S. Anonymous and S. Eponymous and S. Pseudonymous and S. Homonymous and S. Paronymous and S. Synonymous” といった神秘的な聖者までいる。アイルランド人の愚かしい聖者信仰は、彼等が被るローブに織り出された “the blessed symbols of their efficacies” によって更に強調される。

...inkhorns, arrows, loaves, cruses, fetters, axes, trees, bridges, babes in a bathtub, shells, wallets, shears, keys, dragons, lilies, buckshot, beards, hog, lamps, bellows, beehives, soup-laderles, stars, snakes, anvils, boxes of vaseline, bells, crutches, forceps, stags' horn, watertight boots, hawks, millstones, eyes on a dish, wax candles, aspergills, unicorns. (333)

この目ざましい行列は Barney Kiernan へ向う途中, “casting out devils, raising the dead to life, multiplying fishes, healing the halt and the blind, discovering various articles which had been, mislaid” など多種多様の奇蹟をおこなう。この部分は奇怪に誇張された表現、長くかつ愚かしい羅列そして龍頭蛇尾への転落といった点で、これまでの挿入文と同様であるが、この風刺の主眼はまた別なところにある。Joyce はここでアイルランドのカトリシズ

ムの奇妙な迷信，異常な聖者信仰，その持物の御利益を信じこむ単純さを暴露している。その単純さは Barney Kiernan の冒瀆的な酔漢どものものであると同様に Paddy Dignam の靈魂の再来を述べるのに用いられたような神秘主義の語彙をうのみにする表面上は彼等より知的な人々のものでもある。

最も長い挿入文である処刑の協台詞(301-5)はどんなことにでも熱狂するアイルランド人の多血質を暴露している。この処刑に集まった50万の群集はエメットの処刑や T. B. マクマーナスの葬儀に集まった人民である。しかし彼等は愛国主義者の死をいたんで集まったのでも，イギリスに対する反抗を誇示するために集まったのでもない。彼等は民衆に裏切られ，愛人に見捨られる愛国者の処刑という “a genuinely instructive treat” を見物にきたのだ。休日の楽しい催物にふさわしく，予定の時間までの気晴しに辻芸人が現われ，バラスバンドが演奏される。立会を求められた傑作な名前の “the Friends of the Emerald Isle” はアイルランドの不幸を口にするが，すぐに自分たちの些細な問題で議論をはじめめる。それには “cannonballs, scimitars, boomerangs, blunderbusses, stinkpots, meatchoppers, umbrellas, catapults, knuckledusters, sandbags, lumps of pig iron” がふんだんに用いられる。やがて祭の執行人が威儀を正して現われ，ファンが用意した羊の首をつぎつぎにはねて刃物の切れ味を試す。罪人が解剖されるとき，その臓腑をいれるテラコッタの深なべと，“the most precious blood of the most precious victim” を受けるミルク壺とは，アイルランド人の節約と血なまぐさい暴力，感傷的な信心とをつき合わせたものの表徴である。これらが満たされると “the amalgamater cats' and dogs' home” へ運ばれることになっている。

この協台詞はこの章全体の中でも最もばかばかしく滑稽な茶番劇で，散漫な新聞調は使い古した美辞麗句，名前の羅列，bathos につぐ bathos で分裂しないのが不思議なくらいである。だがその中で愛国者を裏切る民衆が痛烈に非難され，暴力が美化され，口あたりのよいものに変えられているのである。話者のことばはすべてを暴力と化し，挿入文はそれを一般化し美化すると考える French はこの章のすべてに暴力を見ている。イギリス海軍の鞭打ち刑を帝国

主義の野蛮性の象徴だと非難する市民たち (323) はまた、賞金を賭けた凄絶なボクシングの試合に熱狂する市民たち (312) でもある。それを伝える新聞は “Dublin’s pet lamb...the Irish gladiator...the fistic Eblanite” が “the welterweight sergeantmajor...the redcoat...the Englishman...the Portobello bruiser” (313) を破った試合を国家的壮挙に祭りあげる。そして使徒信経のパロデー (323) は暴力がアイルランド人の宗教であると言うのだ。

酒場のこのような雰囲気の中で Bloom は理性に訴え、愛を説くのである。彼はまったく *maschismo* の心得がない。酒を受けず、酒もおごらずに、街のうわさと民衆の夢にひとりで対抗する姿は Chapline のピエロのように滑稽に見えるときがある。The citizen は最初から彼に反感をいだいている。話者は最後のユダヤ人大逆殺を予告するように絶えず Bloom の多弁ぶりを愚弄している。愛国者の死を賛美する the citizen に逆らった Bloom は、酒場に入る早々 “*Sinn fein amhain! The friends we love are by our side and the foes we hate before us*” (301) と外国人扱いされる。それにもかかわらず “prudent” な Bloom が the citizen の偏見を正し、条理を立てて議論を続けていこうとするのは、Hayman が指摘しているように、¹² いま妻 Molly が寝取られているという心理的強迫を考慮しなければ説明がつかない。彼は絞死刑者の “philoprogenitive erection” について科学的見解を述べ (299), Dignam の保険のことで “the wife’s admirers” 振りを発揮して, “the mortgagor under the act” とか “the mortgagee’s right” とかいうことばで話者の頭を混乱させる (306-7)。話題が口蹄疫に及ぶと, Bloom は牧畜業者に勤めた経験を披瀝して動物愛護の必要を説き, 話者のシニカルな嘲笑を受け (“Gob, he’d have a soft hand under a hen”), それを脇台詞が幻児語に翻訳して, Breen 夫妻に同情する “half and half” (315) の感傷だと言う。

Ga Ga Gara, Klook. Klook Klook. Black Liz is our hen.
She lays eggs for us. When she lays her egg she is so glad.

12. “Cyclops”, *James Joyce’s Ulysses: Critical Essays*, p. 267.

Gara. Klook Klook Klook. Then comes good uncle Leo. He puts his hand under black Liz and takes her fresh egg. Ga ga ga ga Gara. Klook Klook Klook. (310)

スポーツが話題にのぼると、the citizen がかつての砲丸投げ選手でゲールスポーツ協会員なのを Bloom は知っているのに、過激なスポーツに反対し、眼の敏捷性を育てると言って、テニスのようなイギリスのスポーツを勧める。その仕返しはすぐに Keogh-Bennett match を主催した Boylan と Molly との関係のあてこすりとなって現われる。そして J. J. O'Molloy が登場して話題が裁判になると、Bloom に対する市民たちの反感は明らかなユダヤ人排斥思想に発展する。この日ダブリン市裁判所判事、sir Frederick Falkiner の前に詐欺事件で立たされ、差し戻しになったあるユダヤ人に関する会話は、sir Frederick の貧者に対する同情や慈悲をたたえる理想化された称賛に発展する。それに続く協台詞は正義のイメージを最大限に飾りたてる。日付まで古代歴、宗教歴、太陰歴で記され、裁判所はそれにならって諸伝説の集塊になる。市裁判事は中世の sir Frederick the Falconer に変身し、イギリスの陪審員、"twelve good men and true" を構成するアイアルの12の種族の代表者からなる "the high sinhedrim" (ユダヤの最高会議) とともに "the law of the brehons" (アイルランド古代法) を施すために着席する。陪審員は "well and truly try and true delivrance" を尽し、真の評決を下すよう求められ、主の御名にかけて "His rightwiseness" をおこなうことを誓う。この大げさな正義の準備の後に情報によって捕えられた者が引き出されると、正義の大道具はたちまち崩れてしまう。

And they shackled him hand and foot and would take of him ne bail ne mainprise but preferred a charge against him for he was a malefactor (317)

これは証拠にもとづき裁判手続を踏んでなされるはずの判決が独断されたのを

示している。それはすぐ後続くユダヤ人に対する the citizen のことばと同じくらい偏見に満ちている。“Those are nice things, says the citizen, coming over here to Ireland filling the country with bugs” (318). Bloom はそれを聞えないふりをしている。The citizen はなおも追求を続ける。“The strangers, says the citizen. Our own fault. We let them come in. We brought them. The adulteress and her paramour brought the Saxon robbers here.” (318) ユダヤ人、寝取られ男、侮辱に対して戦かうこともできない “womanly man” というのが市民たちがいなく Bloom 像である。しかし彼は the citizen の暴力と名前のない話者の無言の圧力にも自説を曲げないだけの勇気と人格をもっている。

—but it's no use, says he. Force, hatred, history, all that. That's not life for men and women, insult and hatred. And everybody knows that it's the very opposite of that that is really life.

—What? says Alf.

—Love, says Bloom. I mean the opposite of hatred.

(327)

しかしこの異論を唱えようのない意見も、Lenehan の偽証でいっぺんに覆されてしまう。この日の朝、Bloom が捨ててしまおう (“throw it away”) と思っていた新聞を Bantam Lyons に与えようとしたとき、彼のことは金杯賞競馬の予想と感違いされていた (84)。そしていま Bloom はダブリンで唯一人大穴を当てたと思いこまれているのである。市民たちの Bloom に対する反感は Lenehan の誤報をすぐに受けいれ、Dignam の保険の世話をしようと Barney Kiernan にきた善意の人を、未亡人や孤児を食いものにする “swaddler” (331), とりわけ祝酒を振る舞う礼もわきまえない吝嗇な異邦人にしてしまう。

Bloom が二度目に酒場に入るとき、面倒が起きそうなのは誰の眼にも明らかである。Martin Cunningham は彼をせき立てる。誇張した文体はその場

にふさわしい緊張を作る。Poseidon の車に擬された二軽馬車の叙事詩的な記述、異国の賓客を送る歓送の儀式が最後の行為を用意する。それは Bloom の屈辱を笑いものにし、同時に彼の行為の英雄的要素に注意をひく。Joe Hynes によって “prudent member” と言われ “he of the prudent soul” (292) として酒場に現われた Bloom が一度だけその prudence を投げ出して、怒号をふりまく the citizen に対抗した。“Christ was a jew like me” (336). 怒り狂った the citizen が投げつけるビスケットの空罐がダブリンの広域にひき起こす地震の記述はひどくおかしい。それはまたこの老人の怒りの破壊力と残忍さを暗示するものである。彼の Bloom を「殺してやる」(“crucify”)というおどしは、この章の “gigantism” のもうひとつの現れにすぎないが、また一面、the citizen の心中の憎悪の深さを正確に表わしている。結局、予言者エリアの炎の車に乗り、キリストの昇天を取巻いた光を浴びて Bloom が退場する茶番劇的な結末は、暴力と偏見の中で愛を説き、一人 the citizen に対抗する道徳的勇気をもっていた Bloom の行為にふさわしいものである。

When, lo, there came about them all a great brightness
and they beheld the chariot wherein He stood ascend to
heaven. And they beheld Him in the chariot, clothed upon
in the glory of the brightness, having raiment as of the sun,
fair as the moon and terrible that for awe they durst not
look upon Him. And there came a voice out of heaven,
calling: *Elijah! Elijah!* And he answered with a main cry:
Abba! Adonai! And they beheld Him even Him, ben Bloom
Elijah, amid clouds of angels ascend to the glory of the
brightness at an angle of fortyfive degrees over Donohoe's
in Little Green Street like a shot off a shovel. (339)

Joyce は “Cyclops” の挿入文で田舎新聞の報道文体から擬似英雄詩の語彙まであらゆる種類の水まし文体の見本を示した。それら一連のパロデーから浮びあがるものは、社会が個人に押しつけようとするある価値観、というよりも愛を退ぞけ愛国主義を受け入れ、道理にかなった議論よりも大言壮語をよし

とし、結局は言語を貶めることによって人生を貶める誤った価値観である。Gigantism は挿入文だけでなく名前のない話者の技法でもあった。それはアイルランド人そしてすべての国民の目的のない平凡な人生の代償作用である誇大妄想と、そこから生まれる過激な愛国主義やユダヤ人排斥思想、その他諸々の精神的貧困のもとである憎悪と偏見を暴露していた。彼自身、その神話的対応者 Odysseus が用いた偽名のように、地位も力も名もない Noman である Bloom が、街のうわさと民衆の夢をバックに暴力を振う the citizen に愛と理性を説く姿はピエロのように滑稽である。寝取られユダヤ人を追求する社会の批判はこの章で最も厳しい。しかし Bloom はけっして話者のように精神を貶めることも、挿入文の夢の世界に逃避することもなかった。悪意と偏見とに満ちた市民に自分の素姓を明すことは、気が狂った Mr Breen の訴訟騒ぎと同じくらい愚かしい。しかし自らを孤独な outsider と意識したときこの Noman は、現代の社会機構の中で疎外を余儀なくされている孤独な人間すべて、Everyman の象徴となるのだ。